巻頭特集

松本から羽ばたく野球少女

小林美玲

KOBAYASHI MIREI

松本国際高校3年生の小林美玲さんがこの春、日本野球機構（NPB）公認の女子硬式野球チーム「埼玉西武ライオンズ・レディース」に入団することになりました。創部1年目から逆境にも負けず野球に打ち込み、見事に勝ち取った新たな舞台。今回は18歳の左腕が歩んできた道のりを振り返りながら、未来を描いてもらいました。

松本国際の立ち上げメンバー 昨年に念願の全国舞台へ

2019年、松本国際・女子硬式野球の1期生として入部しました。女子硬式野球の部活は県内唯一で、当初の部員は5人。他県の学校と合同チームを組んで大会にエントリーしましたが、自分たちは出場機会をつかめない1年目を過ごしました。2年時、新入部員が9人入って単独チームを組めるように。全国大会の出場権は得ていたものの、コロナ禍で中止。「後輩が入って明るく楽しいチームになったのに全国に出られなくて、そこは悔しかったです」と振り返ります。

ようやく実ったのは昨年。3月の選抜で「公式戦デビュー」を飾りましたが、4強入りした京都外大西に0-7の五回コールド負け。最初で最後の夏となった7月の選手権も、初戦の相手が強豪・埼玉栄で1-8と敗れてしまいました。「レベルの差を感じたけど、それでも折れずにみんなで頑張れました。すごくいい経験を積めたと思います」と当時を振り返ります。

この経験を通じ、さらなる成長への意欲をかき立てられました。「悔しさを味わって、次のステップで挑戦したい、さらに上を目指したいと思うようになりました。ここまで頑張ってきたなら、ここで終わらず挑戦したいなと」。

「野球を続けたい」と願い 埼玉西武Lに見事合格

そして埼玉西武ライオンズ・レディースのセレクションを受験しようと決意。「今までやってきた実力を測る場だけど、落ちたらもう野球は終わり。大好きな野球を辞めたくはない」との思いで臨みました。当日は実戦形式で、「その日はすごく調子が良くてボールがちゃんとコースにも決まって、監督さんにも褒めてもらいました」と手応え十分。実際に後日「受かってびっくり」と、自身で目を丸くするほどの吉報が届きました。

中学校では軟式野球部に所属

少年野球チーム

出身は御代田町。3歳上の兄の影響で小学校1年から野球を始めました。「ピッチャーはすごく輝くポジションで憧れがあったので、小さい頃からマウンドで投げたいと思っていました」と投手を熱望。スリークオーター気味のフォームで投じる制球派の左腕で、中学時代までは男子に交じってプレーしていました。

高校でも競技を続けたいのに、県内にはチームがない――と悩んでいたタイミングで、松本国際が創部することを知って即断。住み慣れた親元を離れ、新たな環境に身を投じて野球に打ち込みました。「高校野球は男子だけで、女子は公式戦に出られません。その中で女子だけで舞台に立てるのは本当にうれしいことで、本当に楽しかったです。松本で関わってくれた方々もすごくいい人たちで、恵まれた環境で3年間を過ごせました」と、松本国際で充実の日々を送りました。

制球力とスタミナに自信 憧れの先輩を追って成長誓う

身長153センチと小柄ですが、高校時代に体得したスライダーとチェンジアップも含めた4つの球種を投げ分け、打たせて捕るピッチングが身上。体全体をしなやかに使って投げ、正確にコースを突きます。「ピッチャーは追い込まれるとすごく焦るものだけど、ピンチの時こそ落ち着いて投げられるように工夫はしてきました。焦らず長打を打たせないのが持ち味です」。先発完投型で、スタミナにも自信を持っています。

そして新天地で、さらなる成長を見据えます。もう一つの夢である看護師になるため看護学校との〝二刀流〟になりますが、「ライオンズレディースには素晴らしい選手がたくさんいます。いいところを学んでさらにレベルアップしたいです」と小林さん。その中でも特に多くを吸収したいのが、憧れの選手でもあるエース右腕・里綾実選手。「野球への思いや向き合う姿勢が素晴らしくて、『私もこんな選手になりたい』と思ってライオンズだけを受けました」というほどの存在です。

実は高校3年時にも里選手の野球教室で指導を受ける機会がありましたが、当時は「近くで見られただけですごかったし、緊張して何を聞いたらいいのかわからなかった」とコミュニケーションを図れなかった経験があります。ただ、今回はもうチームメイト。先輩の背中を追いながら、さらに成長した姿へと変貌を遂げるつもりです。